

氏 名 (本 籍)	鈴木 康 史 (大 阪 府)
学 位 の 種 類	博 士 (体育科学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2,190 号
学位授与年月日	平成11年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	近代日本における身体観の変容に関する研究—身体と倫理
主 査	筑波大学教授 教育学博士 片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学教授 阿 部 生 雄
副 査	筑波大学教授 博士 (体育科学) 高 橋 健 夫
副 査	筑波大学講師 教育学博士 清 水 諭
副 査	筑波大学助講師 博士 (医学) 高 橋 正 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 論文の構成

鈴木康史氏提出の「近代日本における身体観の変容に関する研究—身体と倫理」という題目の論文は、序章、第一章～第六章、終章および付録から成り、本文280ページ（脚注含）、文献目録11ページ、合計291ページ（1ページ当たり1200字。400字詰原稿用紙で合計873枚に相当する）となっている。

2. 論文の内容

本論文は明治初期から大正期にかけての「身体観」の変容を、いくつかの世代を代表する思想家たちの思想を対象として実証的、帰納的に描き出そうとするものである。

「身体論」という立場からするならば、本論文の目的は「身体」という表象自体の変容を歴史的に描きだすことにあり、本論文が対象とするのは固定した「身体」概念ではなく、その領域から定まらない「身体的なるもの」とされる。そしてそれゆえに、本論文は身体の対概念である「精神」なる対象をも視野にいれ、「精神/身体」なる二分法自体がいかに変容したか、という課題を取り上げている。その意味では本論文は、「身体」についての「精神史」というかたちで、近代日本のインテレクチュアルヒストリーをこれまでの近代日本の思想史、哲学史とは全く異なった視点からの再構成するものといえる。

序章において、以上のような問題点の指摘、先行研究の検討が行なわれたのち、第一章の前半部では近代思想を用意した前提としての朱子学の検討がまず行なわれ、朱子学の循環する世界観の中における心身観が検討された。それに対して後半部ではまずそのような世界観を覆す蘭学（医学）の身体観が、次いでこれらの成果を引き継ぎつつ、「文明論」によって世界観を覆した福沢諭吉の思想が検討された。そこに見出されたのは、近代的主体、特に倫理的な「主体」を統合的に表象する「一身」という人間のあり方であった。福沢によって提示された「一身の独立」は、その用語など多くの面で近世的な影響を受け継ぎつつ、その世界観、人間観において提示したものである。

第二章においては、このような「文明論」「一身」といった近代的なあり方へと時代が変容してゆく明治二十年以前において、人々はいかなる運動実践を行ない、それらはどのような意味を持っていたのかが検討された。そこで指摘されたのは、「文武」という統合的、行為論的な人間観がなお優位に立ち、「三育」という分析的人間観とせめぎ合う様であり、「武」的な価値が「ゲーム」に閉じこめられずに政治的な価値となお連動していると

いう、現代とは異なった「運動」の文節のされ方であった。たとえば森有礼の兵式体操もこのような状況から解釈されねばならず、これらは「一身」なる統合的な人間理解を背景にしてこそ理解されうるのである。

第三章においてはこのような統合的な人間観が分析的な人間観に座を譲り、主体のあり方自体が変容してゆくという事態、すなわち「主体」という領域から「身体的なるもの」が抜け落ちてゆくという過程が検討されている。まず、そのような分析的な人間観の学問的な前提として、ヨーロッパ的な「心身二元論」の受容が指摘された。西周、元良勇次郎らによって「心理学」という領域が「哲学」から分離するが、その分離を支えた「科学」という方法による統一的な心身把握が破綻し、「心身二元論」は受容されざるを得なくなる。そしてそれを受けて哲学者井上哲次郎は、福沢の道德論を「身体」の道德論であると批判し、自らの倫理学説の中心を「精神」に置き、「精神」的な「主体」のありかたを提示する。その「精神」を指示する語は井上によって翻訳された「人格(Personality)」である。ここに二元論に則った「人格」的な「主体」のあり方が生成することとなる。

第四章と第五章においては、第三章において検討された「人格」という倫理的な「主体」を創作しようとする動きとしての「人格修養論」が検討された。第四章においては「人格修養」の理論が検討されたが、そこでは必ずしも「身体」は等閑視された訳ではない。だが、それは「精神」を「身体」と明確に分離し、「精神」を「身体」の上位に置く理論であり、ここに明確に「身体」と「精神」に上下関係が設定される。そしてさらに、このような心身論は、国家主義的な立場にも、個人主義的な立場にも、前者には社会有機体説を通して、後者には内面という逃避所を設けることによって、支持されうるものであったが、井上哲次郎らを中心とした「人格」論者たちは国民国家の形成期において、国民を「主体化」してゆく「頭」と「密」と評される政治的な「学問」を展開し、その学問は「身体/精神」「科学/倫理」という二重性によって支えられていた。このような修養世代の政治性と身体論の連関が第五章において具体的に検討されている。

第六章においては、このような政治的な学問に反発した大正教養派といわれる一群の哲学者達が検討された。彼らの代表である阿部次郎「人格主義」を展開し、「身体」を徹底的に客体化し、物化した。そして、このような思考の背景には、彼らが思想形成をした第一高等学校における「文」「武」の対立が影響を及ぼしており、「文」の側に立って「武」的なあり方と対決した彼らはその武を象徴する「競技運動」から自らを差異化する「文弱」の哲学を形成することとなる。そして彼らは岩波書店という自前のメディアを持ったことで、アカデミズムのあり方に対して、少なくとも高度成長期に至るまでの影響力を及ぼし、現在に連なる「スポーツ観」「身体観」の形成に重要な役割を果たしたのであった。

終章においてはまとめと今後の展望が述べられている。近代日本において倫理を担う「主体」のあり方から「身体的な」領域が抜け落ちていったという歴史の意味が文明化の流れと共に検討され、今後の課題として身体という表象の根拠が問い直されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、身体論に独自の新しい視点を開くものといえる。ともすれば現代的な視点から「身体」「精神」をなぞってしまうこととなった従来の研究に比較して、本論文はそのような自明性をまず懐疑する地点から、わが国の近代における現在とは異なった「身体的なるもの」のありかたを提示し、その変遷を明らかにしたものといえる。これは「身体的なるもの」の教育学である「体育学」という領域が現在かかえる「分化と統合」という課題に対する歴史的な解答ともなっており、「体育学」のあり方そのものに対する、その理論成果の応用が期待される。実証的研究として引用も豊富であり、近代日本の思想史としても独自の視点を示し、今後さらなる展開への可能性を秘めた優れた論文であるといえる。今後は本論文で取り扱わなかった他の思想家たちを視野に入れた広汎な検討が期待される。

よって、著者は博士(体育科学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。